

幼稚園での異年齢交流

○吉岡晶子 榊田正子 伊集院理子 上坂元絵里 高橋陽子 佐藤寛子 清宮聡子 渡邊満美
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

1 はじめに

私たちは、保育者と子どもの関係をとて大事にして保育をしている。しかし、その関係に重きを置きすぎて、子どもの力を引き出しきれていなかったという思いがある。そこで私たちは、子ども同士のかかわりをもっと生かしたいと考え、同年齢や異年齢のかかわりの記録をとり、検討してきた。

今年度は異年齢の交流を意識し、年少組の降園時に、年長児が保育者と一緒に片付けの手伝いに行く、入園式や誕生会の際、保育室から遊戯室まで手をつないでいくなど、生活の一場面を生かしてかかわる機会を意図的に持つようにしてきた。それらの体験が生かされ、その後の生活の中で、子どもたちが自分から異年齢児とかかわろうとする姿が増えてきたと感じている。

ここでは、異年齢の交流について私たちが考えていることをまとめ、一つの事例を通して異年齢交流の要点について考察する。

2 私たちが考える異年齢交流

私たちは異年齢交流について以下の3点を押さえて考えている。

自然な交流 幼稚園ではそれぞれがやりたい遊びをみつけて生活している。同じ場で一緒に生活しているとそれぞれの遊びの流れがありながら、自然に出会いが生まれる。その出会いを異年齢交流の機会として生かしていく。

互惠性があること 年長が何かをしてあげるといふ一方向的なことのみではなく、双方にとって得るもの、育つものがある体験になるようにする。

かかわる力の育ちの場 さまざまな人やものごとと出会い、気持ち、身体が動き、そこで得た体験がまた新たにかかわってみようという気持ちにつながるようにする。

3 お面づくりの事例

■ 1日目

庭でウルトラマンになって遊ぶ3歳児K、R、Nに、お面を作ることを投げかけてみる。輪郭は担任が描いて、自分たちで続きを描こうとするが、うま

くいかず破ってしまう。ここで担任が描いてしまうより、年長児に描いてもらってはと見え、年長組に行く。K自身が「お面を作ってください」と年長担任に伝えられるように助け、しばらく様子を見てから担任は戻る。(中略) お面を作ってもらったのは初めての経験で、帰りにぜひ母親に見せたいというほど嬉しそうだった。(年少担任記)

年少の子どもたちや年少担任の思いは受けとめたものの、年長の子どもたちにどう伝えるか悩んでいたところ、「ウルトラマンの絵ならYくんが上手だよ」とMがYを呼びにいく。その声を聞いて、園庭にいたYは嬉しそうに部屋に入ってきた。「いいよ」といって、一気に3人分のウルトラマンのお面を描き上げ、年少児に手渡した。(年長担任記)

■ 2日目

登園後すぐ、Nがお面を作りたいというので、他児3人も伴って年長組に行く。(年少担任記)

今日も年少児が部屋にやってくる。昨日かかわったYはもう遊び始めていて部屋にはいない。まだ全員登園していないし、部屋にいる人たちは思い思いに遊び始めていた。担任が「“作って欲しい”って来てるみたいよ」と誰にともなく、つぶやく。初めは「描けない」「できない」という声が多かったが、しばらくすると、FがYを呼びに行った。Yは渋々ではあったが、どういふお面がいいのかを聞き始めた。様子を見ていたE、H、Aもそこに加わり、年少児とのやりとりが始まった。(中略) 一連のやり取りの後、年長児も年少児も自分のしたい遊びへと戻っていった。(年長担任記)

■ 事例について

3歳児の担任が、遊びのイメージが共有できるようにとの思いから提案したお面づくりを、5歳児に託してみることで、年長・年少の子どもたちの交流が始まった。

年少担任の思いは受けたが、年長担任は、無理な方向づけはしたくなかった。年少児とのかかわりが年長児の生活の中になるべく自然な形で生まれてくるようにするにはどうしたらいいかと悩んだ。

1日目は、MがYの力を認めた表現をすることでYが自信を持ち、年少児3人にお面を作った。もら

った3人にとっても、嬉しい経験となった。

2日目は、前日の流れから、年少組の他の子どもたちがお面を作り年長組に来るが、それを受けた年長担任はお面の作り手がYだけにならず、他の人たちにも広がって欲しいと考えた。結果的には、Yが中心となるが、年齢の異なる子どもたちが、それぞれの思いを持ちつつ年長組でひとつの机を囲んで、場と時間を共有した。お面を作ってあげた充実感や、作ってもらった喜び以上に、そこでの新しい出会いや関係のひろがりに意味があったと感じた。また、自分のやりたいことを心に残しつつも、かなり長い時間、Yが年少児とお面作りのためのやりとりが出来たのは、自分のしたいことは後からでも出来るという気持ちや、同じ組のE、H、Aの支え、Yを頼りにしてその場に居続けた年少児の存在があったからであろう。

翌日からは、Aを中心としたお面やさんへと展開し、新たな年少児、年中児との交流にもつながっていった。

4 異年齢交流の要点

この事例をもとに異年齢の交流について話し合った結果、次のことが要点として見えてきた。

■ 交流場面での保育者のかかわり方

① 保育者の連携

年少児の遊びの流れから始まった活動であるが、年長担任は、クラスの状況に無理のないよう、子どもたちの自然なかかわりが生まれるような対応をした。この背景には、それぞれの保育者が主体的に判断し、それをお互いに認め合える信頼関係がある。このように保育者同士が託し合い、それぞれのかかわりを認め合い、思いを伝えあって連携することが、子どもたちの交流をうながしている。

② かかわりをつなぐ働きかけ

子どもの思いを実現するときに、保育者は子どもとの二者関係だけでなく、子ども同士のやりとりの中で育つものを期待して、他の子どもにも働きかける。一つのきっかけから始まった交流は、そのことだけに留まらず、多様に広がる可能性を持っている。保育者がそのことを意識して、周りに波及していくような働きかけをさりげなく行うことで、交流が広がり、より多くの子どもの育ちにつながっていく。

③ 子どもと共に状況を受けとめ、支えること

生活の中で新たに生じた場面を、保育者が性急に方向づけるのではなく、子どもたちと一緒にまずは

受けとめてみる。異年齢のかかわりには、困ったり、迷ったり、思うようにならなかつたりすることも出てくる。保育者は、子どもと共にこうした葛藤を受けとめ支え、子どもたちがそれを乗り越える体験になるようにと願う。このような体験を通して、子どもたちは少しずつ自信を持ち、自分からいろいろな人とかかわろうとする。

■ 交流がなされる前提になっていること

④ 生活基盤の安定

保育者との信頼関係があること、友達から認められていると思えることで、クラスの中に自分の場ができ、安定する。それが基盤になり、新しい状況を受けとめ、いろいろな人やものに積極的にかかわろうとする気持ちになれる。

⑤ 自分の時間が保証されていること

子どもたちは今までの体験から、幼稚園では時間が保証されていて、やりたいことが充分やれるという実感をもっている。そのことが、生活の中で出会う状況に、自分をひらき、行動を選択していくことの基盤になっている。

■ 環境を視野に入れた配慮

⑥ 場を生かすこと

活動が多くの子の目に触れ、わかりやすくなるように、場所や物を準備したり、場所や物の選び方や使い方を示唆したりすることで交流が充実する。

保育者が、場を意識して時機をのがさずかかわることが重要である。

これらの要点をふまえ、意識することで異年齢の交流がより豊かなものになっていく。

5 まとめ

私たちは今年度、異年齢交流をテーマに取り上げた。異年齢交流という視点で、保育を見直してみても、かかわる力を育てることが、一人ひとりの育ちにつながるということを改めて感じた。

交流の中で、子どもたちはいろいろな人と出会い、いつもと違う嬉しさや楽しさ、緊張感や葛藤、充足感など様々なことを感じている。このような体験の積み重ねが、人やものごとに、より前向きにかかわろうという姿勢をもたらし、ひいては子どもの育ちにつながっていく。

今回は異年齢交流を通して考えてきたが、今後も、人とかかわる力の育ち、一人ひとりの子どもの育ちを様々な角度から探求していきたい。